

# あーばんとーく

- 専修講座「ちえぶくろの活用講座」の開催 (P.1)
  - 「神戸の文脈 都市の文脈」報告 (P.2)
  - 空間像をどのように捉えるか (P.3)
  - お知らせ「鈴木 城 神戸市電絵画立体作品展」ほか (P.4)
- あーばんとーくの感想をお寄せ下さい!  
発行: こうべまちづくりセンター  
<http://www.kobe-toshi-seibi.or.jp/matisen/>

## こうべまちづくり学校専修講座 Aコース「ちえぶくろの活用講座」の開催

現在、こうべまちづくりセンターでは、市民が主役の安全で安心なまちづくりを進めるために“協働と参画のまちづくり”について学び考える「こうべまちづくり学校」の専修講座を開催しています。

受講者は、テーマ毎にA～Hの8コースに分かれて学んでいます。

このうち、全5回の日程(9月6日～10月1日)を終了したAコース「ちえぶくろの活用講座」についてご紹介します。

この講座は、地域活動を推進するための心構えやノウハウのヒントをつかんでいただくことを目的に開催しています。

### ～1対1のコミュニケーションを学ぶ～

第1回、第2回の講座では、「1対1のコミュニケーション」をテーマに、東末真紀さん(神戸まちづくり研究所)が講師で、コミュニケーションの基本となる安心を生み出す「1対1」のコミュニケーションとはどのようなものかを学びました。

「話し役」と「聞き役」の二人一組で役割を交代しながら「自分の嫌いだと思っている点」などをテーマとして会話をを行い、その中で気づいた「1対1」のコミュニケーションに必要なこと、コミュニケーションポイントとなる「傾聴(アクティブリスニング)」について体験しました。↓



また、ファシリテーターの技術として、大きな紙やホワイトボードに書き込み、話し合いをまとめる手法「ファシリテーショングラフィック」について学び、グループワークを行いました。

### ～自分たちのファシリテーションを考える(まとめ)～

第5回はこの講座のコーディネーターの松原さん(スタチオ・カタリスト)が講師で、「傾聴」、「観察者の視点」などこれまでに学んだ内容を活用してワークショップを行いました。

### ～グループワークのファシリテーションを学ぶ～

第3回、第4回は「グループワークのファシリテーション」をテーマに、西修さん(ワークショップ研究会)が講師で、第1回、第2回で学んだ「1対1」のコミュニケーションを発展させ、「1対多(グループ)」のコミュニケーションでのポイントを学びました。その中で、3人1組になり、話し役・聞き役・観察役を順番に役割分担し、「1対多」における「1対1」とは違った難しさを体験し、ファシリテーター(話し合いを促進する進行役)に必要な「観察者の視点」を学びました。

地域活動を推進するためのマニュアル「地域活動ちえぶくろ」を題材に、その中でも基本となる「話し合いの進め方(会議運営の手法)」にポイントを絞った実践的講座であったので、座学との違いに戸惑われた方もおられたかも知れません。しかし、全5回で延べ86名の方が受講され、回を進める毎に、生き生きと楽しみながら、積極的に学習される皆さんの姿が印象的でした。この講座がきっかけとなり地域での活動がより活発になることが期待されます。

# 「神戸の文脈 都市の文脈」報告

さる9月9日午後1時30分から、こうべまちづくり会館2階ホールにて、「プランナーズ・ネットワーク神戸」の有志によるスライド&トークショー「神戸の文脈 都市の文脈」を開催いたしました。参加者は全体で約80名、会場がほぼ満員になる盛況でした。

「プランナーズ・ネットワーク神戸」は、建築家やまちづくりコンサルタント、研究者、行政職員、編集者など、まちに関心を持つメンバーによるゆるやかな集まりです。



スライド&トークショー（会館2階ホール）



パネル展（会館1階オープンギャラリー）

さて、このネットワークでは震災後3年目に、神戸市灘区・東灘区の激甚被災地の全ての道を踏破し、そこに現れつつあった新しいまちの姿を、網羅的に記録するという活動を展開しました。その成果をパネルにまとめ、全国諸都市で巡回展を行い、被災都市のまちづくりに関する意見交換と交流を通じ、考察を深めてきました。今回のスライド&トークショーは、その延長に位置づけられるものです。復興まちづくりがある程度進み、まちの姿が定常化してきた状況で、震災後10年という節目に、再踏査し、その変化を記録し、まとめ、参加者の皆さんと議論を深めようという趣旨で企画しました。幅広い論点が得られるように、パネラーとして、沖縄、神戸、京都から、それぞれ20代、30代、40代のまちに関わる専門家を招き、議論に加わっていただきました。

主催者からの報告は、大きく3部に分けられます。それぞれ「A：建築の閉鎖／解放」「B：記憶の継承／消滅」「C：対話の埋没／表出」というテーマで、まちに現れた諸現象が整理、報告されました。Aでは、震災後今に至るまで残されている空地、仮設的住宅の恒久化、群住宅と名付けられたミニ開発住宅の変化、高層マンションの林立、震災後早々に流行した建築素材や植栽の変化など、建築や住宅に関わる諸現象を、閉鎖／解放の軸で読み解きました。Bでは、震災後に残された様々な景観や痕跡、例えば路地や地蔵、石塀、井戸、道標等々を中心に、記憶の継承のされ方、あるいは消滅への過程などを示しました。そしてCでは、

住宅やその周辺に現れた様々なメッセージ、具体的には、建物周辺に置かれた人形や小物、植栽等を取り上げ、そこに対話の表出や埋没、可能性を読み取りました。

各部の報告の合間に、パネラーからコメントが加えられ、それが後半のパネルディスカッションに引き継がれました。報告者とパネラー、そして参加者からの発言により、震災イメージからの解放、「神戸の文脈」の見えにくさ、災害でも変化に耐えやすいもの、区画整理後のまちの姿の均一性の意味、生活実体に基づかない景観の表出の課題、住宅敷地境界線上に現れるモノの微妙な置かれ方のセンス、見えにくい変化に気づく仕掛けの重要性、まちを見る時の感じ方の違いを重ね合わせる方法の必要性など、数多くの興味深い論点が提出されました。

今後、兵庫県下のまちづくりに取り組む諸地区や、今回、パネラーとして意見をいただいた沖縄や京都で、今回取り上げた内容を更に深め再整理して、巡回展を予定しています。今回示された論点が、その中でより深められ、これからのまちづくりに有意義な視点や気づきが生まれることを期待しています。

なお、同内容のパネル20数点はこうべまちづくり会館1階オープンギャラリーに、9月1日から1ヶ月間、展示されました。また、この事業は「神戸からの発信ネットワーク」助成事業の助成を受けて実施されました。関係者のみなさまに感謝致します。

松原永季／プランナーズ・ネットワーク神戸

# 空間像をどのように捉えるか

空間像研究会の活動 その1

浜田 有司 (空間像研究会)

## ■対象領域の大きさによる違い

空間像とひとくちに言っても、それはどのようなものなのか、定義付けを行うことは可能でしょうか？都市全体を考えると、小学校区程度の地域をみるときなど、捉えようとする対象の大きさによっても、空間像はすいぶん異なったものになると考えられます。

例えば、地図などを使って都市の構造を認識しようとする都市計画的視点に立てば、神戸市域全体や六甲山系以南の既成市街地を対象として空間を捉えた場合、市街化区域と市街化調整区域の線引き、既成市街地の三層構造（山麓部の住宅地、中央部の商業地、臨海部の工業地の三層）など土地利用の違いや、市内各地域を結ぶ道路のネットワーク、といったものが都市の空間像として浮かび上がってきます。

このくらい大きな領域が対象になると、その内部に入り込んで空間の広がりを感じることは無理なので、地図の上から見るという“二次元的な”捉え方によって空間像を描くこととなります。

次に、数十ヘクタール程度のいわゆる「地域・地区」と呼ばれる範囲まで縮尺を小さくしてみると、街区の形や道路の幅員の違い、家の建ち方（密集している 整然としている etc）などが地図から読みとることができ、空間像として意識できるものが広がってきます。

住宅地の中に公園があったり、街を流れる川や商店街があったり、私たちが日常



的に歩いたり暮らしたりしている「まち」のスケールに合ってくるので、例え行ったことのない場所であっても、地図を見ながら、その空間に入り込んで想像してみることができるようになります。つまり、さきほどの“二次元的な”捉え方に比べれば、町並みが“三次元的に”イメージされるようになってきます。

実際に、これまでの神戸のまちづくりの

取り組みにおいても、この程度の広がりをもつ地域として、地元協議会づくりや景観形成が進められていることが多いようです。古くからの小学校区や自治会などが、おおむね数ヘクタール～数十ヘクタール程度の圏域を持っていることから見ても、「まちの空間像」としてはこの程度の広がりの中で捉えるのがわかりやすいのではないかと考えられます。

さて、さらに縮尺を小さくして、せいぜい数十メートル四方の範囲で空間像を考えてみるとどうなるでしょう。通りをはさんで建つ家の家並みがイメージされます。ひとつひとつの建物の他、街路樹や広告やいわゆるストリートファニチュアなども目に入ってきます。色をはっきり意識されるのもこれくらいの大きさの空間からでしょうか。人や車の流れなど、動的なものも空間像を構成する要素として考慮されることでしょう。

まち全体の広がりを捉えるというのではなく、駅前広場であったり商店街であったり、まちの何らかの中心や特別な場所をクローズアップして、細やかなデザインを考えてみるようなときには、このくらいのスケールで空間像を捉えることが必要かもしれません。

## ■空間像を捉える視点

空間像を捉える視点の一例として、対象とする領域の大きさを挙げましたが、この他にも、まちの成り立ちの歴史から捉えた空間像や、地域住民のコミュニティのまとまりから捉えた空間像など、空間像とひとくちに言っても、その視点はさまざま、ひとつに定義付けることはできないと思われれます。

また、そこに住み続けてきた人たちから見た我が町の姿と、観光などで訪れた人たちが見た町の印象は違うでしょうし、行政に携わる者が感じる町の見え方も異なっているでしょう。町について考える人の数だけ空間像があるのかもしれない。

# まちづくり会館 企画展

会館地下1階ギャラリーにて（入場無料）

永遠なのは思い出だけ

鈴木 城

## 絵画立体作品展

昭和の神戸市電と仲間たち

開催日 11月15日(木)～11月27日(火)

休館日 11月21日(水)

開館時間 午前10時～午後6時



三越前・アクリル画（昭和38年）

神戸の街から路面電車が姿を消して37年になります。

神戸の市街電車は明治43年にその歴史をスタートさせ、以来大正6年の市営化を経て、長い間市民の足として活躍してきました。市内のいたるところ、緑の電車が元気に走り回る姿を見ることができました。この間、戦争で、大きな被害もありましたが、戦後復興の中で市民生活を支える基盤の一つとして大いに力を発揮しました。しかし、その後の社会情勢の変化の中、路線の縮小を余儀なくされ、遂には昭和46年3月に全面廃止となります。

今回の展示会では、時代を追って神戸市電を振り返り、当時の神戸の町並み・風景とともに仲間の国鉄（JR）・私鉄の姿に再会していただきたいと思います。

主催 こうべまちづくりセンター  
 協賛 元町商店街連合会  
 後援 神戸市・神戸市交通局  
 神戸市教育委員会  
 神戸市民文化振興財団  
 みなと元町タウン協議会

## まちづくり会館展示のお知らせ

### 1階オープンギャラリーの予定

期 間	内 容 ・ テーマ	主 催 者
10月 1日(金)～30日(火)	防犯パネル展（前半） 「東南海・南海地震に備えて」パネル展（後半）	神戸市危機管理室
11月 1日(木)～30日(火)	メロディブリッジコンテスト受賞作品	建設局道路部計画課

### 地階ギャラリーの予定

期 間	内 容 ・ テーマ	主 催 者
10月25日(木)～30日(火)	第18回遥洋会油絵展	遥洋会
11月 2日(金)～ 6日(火)	アルペジオ合同教室作品展《油彩,水彩,写真,書道他》	アルペジオ カルチャー
11月 9日(金)～13日(火)	小林彰次郎 ポートレイト作品集《写真》	小林彰次郎
11月15日(木)～27日(火)	鈴木 城 神戸市電絵画立体作品展《水彩等》	こうべまちづくりセンター

展示時間：午前10時～午後6時（水曜日休館） ※初日、最終日は展示時間が変更になる場合があります。



最寄駅

地下鉄海岸線 みなと元町駅西口から1分  
 高速 花隈駅東口から3分 西元町東口から5分  
 JR・阪神 元町駅西口から8分

こうべまちづくり会館

〒650-0022

神戸市中央区元町通4丁目2番14号

開館時間：午前10時～午後6時（水曜日休館）

電話：078-361-4523 FAX：078-361-4546

ホームページ <http://www.kobe-toshi-seibi.or.jp>

コミュニティ相談センター（まちづくり会館4F）

自治会の会報等の印刷サービス、運営等の相談

電話・FAX：078-361-4565

受付：午前10時～午後6時（水曜日休館）

ただし、印刷は5時まで